

〈論 文〉

知里幸恵『アイヌ神謡集』の難読箇所と特異な言語事例をめぐって

北海道立アイヌ民族文化研究センター

研究紀要

第10号

2004年3月25日発行

佐藤 知己

〈論 文〉

知里幸恵『アイヌ神謡集』の難読箇所と
特異な言語事例をめぐって⁽¹⁾

佐藤 知己

- 目次
1. はじめに
 2. 『アイヌ神謡集』本文の抱える諸問題
 3. 『アイヌ神謡集』における kane の用法と本文の解釈
 3. 1. 千歳方言における kane の用法
 3. 2. 『アイヌ神謡集』における kane の用法
 3. 3. ‘eramuka patek kane’ の解釈について
 3. 4. ‘ari an rekpo chiki kane’ の解釈について
 4. 「半母音挿入」と接辞の分類
 4. 1. 千歳方言における半母音挿入と接辞の分類
 4. 2. 『アイヌ神謡集』における半母音挿入と接辞の分類
 5. 「第三類の動詞」と接辞の分類
 5. 1. 千歳方言における「第三類の動詞」と接辞の分類
 5. 2. 『アイヌ神謡集』における「第三類の動詞」と接辞の分類
 6. wa an の用法と ‘tukan wa ankur’ の解釈
 7. 検討が必要と思われる他の箇所について
 7. 1. ‘chipapa’ について
 7. 2. ‘hotkei nani etoro hawe meshrototke’ について
 7. 3. ‘wenash shiri chiwenchisehe koshirepa shiri’ について
 7. 4. ‘chipokonanpe kohokushokush’ について
 7. 5. 「複数形」の例外的使用について
 8. 終わりに
- 謝辞
- 参考文献

キーワード：知里幸恵、『アイヌ神謡集』、幌別方言、千歳方言、kane、第三類の動詞、半母音挿入

(1) 本稿は第108回北大言語学談話会（2003年12月5日）における筆者の発表「知里幸恵『アイヌ神謡集』は読めるか—難読箇所と特異な言語事例をめぐって」に基づいている。なお、本稿は平成15年度科学研究費（基盤研究C）2、「古文獻によるアイヌ語諸方言の研究」、研究代表者北海道大学大学院文学研究科佐藤知己、課題番号12610547）による研究成果の一部である。

1. はじめに

筆者はこれまでに実地調査に基づく千歳方言に関する研究(末尾の「参考文献」参照)をいくつか発表し、現在も研究を続行中である。千歳方言で明らかとなって来たこれらの現象が、他の方言においてどのような位置を占めるのかは興味ある問題である。すなわち、千歳方言に存在する現象が他方言にも存在するかどうか、また、存在するとすれば、全く同じなのか、あるいはなんらかの差異を有するのか、という問題は、当該の現象がアイヌ語全体において持つ位置づけを知る上で必要不可欠なものである⁽²⁾。本稿では、千歳方言のいくつかの現象について、知里幸恵『アイヌ神謡集』を用いて、千歳方言と類似した現象が見られるかどうかの検証を試みた結果を報告する。『アイヌ神謡集』を考察の対象としたのは、このテキストが研究者によって作られたものでなく、アイヌ語の話し手自身によって書かれたものであって、従って言語資料としてより信頼性の高いものではないかと考えたからである。以下の結論を先取りすれば、概略的に言って、千歳方言における当該の現象は『アイヌ神謡集』においても基本的には存在することが確かめられた。このように話者も地域も異なる二つの資料が同様な現象を示すということは、筆者が千歳方言において提案して来た仮説が全く恣意的なものというわけではない、ということを示すものとする。また、それと同時に、ある場合には『アイヌ神謡集』には、千歳方言とは異なる、興味深い差異が存在することも明らかとなったことを報告する。さらに、これらの問題の考察は、アイヌ語学において重要であるばかりでなく、『アイヌ神謡集』の本文解釈においても、本文の誤脱を推定し、正しい解釈を提案する上で重要な役割を果たすものであることをいくつかの実例を挙げて示す。最後に、現時点では推測の域を出ないものではあるが、解釈上問題があると思われるいくつかの点を指摘し、さらなる検討の必要性について論じる。

2. 『アイヌ神謡集』本文の抱える諸問題

『アイヌ神謡集』の言語について調査を進めていく前に、『アイヌ神謡集』の文献学的な側面について理解しておく必要がある。

『アイヌ神謡集』の誤植については、既に切替(1989: 157—159)が郷土研究社再版と弘南堂書店再補訂版の異同を指摘したのをはじめとして、近年では北道(2002: 付録3-25)が郷土研究社初版、同再版、弘南堂補訂版、同再補訂版、岩波文庫版の異同について広範かつ詳細な調査を行っ

(2) 一部のアイヌ語研究においては、ある言語の観点を他の言語の記述に押しつけてはいけなく、という言語学の基本原則が誤解されて、他方言をあえて無視して記述するのが言語学の専門家のとるべき態度である、という極端な風潮を生んだように思われる(そのような不合理な記述の一例については佐藤(2004a)参照)。しかし、注意深く作業を進めれば、同じ言語の異なる体系を有する方言の対照研究は、それぞれの方言の記述の精度を上げていく上で極めて有用な方法の一つであると筆者は考える。

ている⁽³⁾。これらの調査の結果、これまでに出版された主要な『アイヌ神謡集』の本文には多くの誤植のあることが明らかにされている。詳細はこれらの諸家の研究に譲るが、ここでは参考までに、既に明らかにされているこれらの調査結果に、筆者自身の調査結果を多少加味したものを以下の表1に示す。表の中で、「同左」とあるのは、左側の語形と同じであることを示す。また、問題の本文の異同が切替（1989）、北道（2002）によって指摘されているかどうか併せて示した。備考欄では服部（1964）と知里森舎（2002）を援用しつつ、妥当と推定される元の形を参考までに示した（ただし、スペースや句読点については判断を控えて？とした場合がある）。なお、この表の成り立ちは、概略次のようなものである。すなわち、まず、筆者が郷土研究社初版について気のついた誤りについて、郷土研究社再版、岩波文庫版と比較調査した表を作成した。その後で弘南堂再補訂版について、活字の大きさが異なっている部分（おそらく訂正が加わっていると思われる部分）を主にチェックし、それを残りの三つの版と比較した結果を加えた。最後に、切替、北道の調査結果をさらに加えた（ただし、日本語部分に関する誤植は本稿の目的とは直接関係がないので割愛した）。その際、筆者の調査結果から漏れていた多くの誤植箇所について教えられるところが多かった。このように、この表は、それぞれの版を同時平行的に比較したものではなく、主に郷土研究社刊初版について気の付いた疑問箇所に基づいているために、それ以外の版で起こったかもしれない独自の誤植については筆者の調査が行き届いていないことを認めざるを得ない。それにもかかわらず、このような疎漏な調査によっても、先学が指摘している個所以外の誤植がいくつか発見されており、また、その他に誤植の疑われる微妙な個所も相当な数に上ることがわかったのは有益であった。このような調査結果から引き出される重大な帰結は二つある。まず一つは『アイヌ神謡集』のような代表的なアイヌ語資料に関してさえ、きちんとした本文校訂がまだかつてなされていない、という点である。このようなことが起こった原因としては、なによりもまず、北道（2002）が述べているような事情で初版に極めて多くの誤りが発生してしまったにもかかわらず、それを正すことのできる著者はその時点で既に亡く、原稿も行方不明になってしまった、という不幸な事情があったと思われる。その後、非組織的な改訂が何の注記もなしに散発的、恣意的に加えられることはあっても、組織的な校訂は依然行われないうまま、初版の誤りの多くが現在最も普及していると思われる岩波文庫版においても引き継がれたままになっているのは残念なことである。もう一つは、今述べたことの当然の結果であるが、『アイヌ神謡集』をアイヌ語学の研究資料として用いる場合には、相当な注意が必要である、という点である。既に述べたように、『アイヌ神謡集』はアイヌ語話者自身によって書かれたものであり、アイヌ語研究上かけがえのない価値を持つものであることは疑いを入れない。しかし、明らかに誤植であることが容易に認定できる個所さえ、これだけ多数に上るのであるから、他の、もっとわかりにくい誤脱が数多く存在するかもしれない、という可能性を利用の際には常に考慮する必要がある、ということなのである。幸いなことに、本文校訂

(3) 片山（2003）はアイヌ語に関する該博な知識と「知里幸恵ノート」を駆使して、これまで引き継がれてきたテキストの誤植を改めて注目に値するが、誤植を訂したことを逐一明示しているわけではない点が惜しまれる。

表 1

初版 1923	再版 1926	弘南堂再補訂版 1974	岩波文庫版 2002	誤植指摘	誤植指摘	正しいと思われる形
yuieyukar (目次)	同左	yaieyukar	同左 (p.6)	切替 1989		yaieyukar
yaieyukara (p.2)	同左	yaieyukar	同左 (p.2)	切替 1989	北海道 2002	yaieyukar
pono (p.8)	同左	同左	同左 (p.16)		北海道 2002	poro
wenotaupum (p.8)	wenotaupun	wenotaupum	wenotaupun (p.16)			wenotaupun
ashurpeututa (p.12)	同左	同左	同左 (p.22)	切替 1989	北海道 2002	ashurpeututta
Chise (p.18)	同左	同左	chise (p.28)			chise
unu hu (p.22)	unuhu	同左	同左 (p.32)		北海道 2002	unuhu
nunuka (p.22)	nunuke	nunuka	nunuke (p.32)	切替 1989	北海道 2002	nunuke
humpe (p.24)	同左	同左	同左 (p.36)			humpe
ushiyakko turpa (p.24)	同左	ushiyukkoturpa	ushiyakko turpa (p.36)		北海道 2002	ushiyukko
payeash inkarash (p.24)	同左	payeash inkarash	payeash inkarash (p.38)	切替 1989		?
kni (p.24)	同左	kuni	kuni (p.38)		北海道 2002	kuni
newaanpe humpe (p.26)	同左	newaanpe humpe	newaanpe humpe (p.38)	切替 1989		?
aehomatup (p.28)	同左	同左	achomatup (p.40)		北海道 2002	aehomatup
rupa (p.28)	同左	turpa	rupa (p.42)	切替 1989	北海道 2002	turpa
kokokse (p.29)	同左	同左	kokokse (p.41)		北海道 2002	kokokse
Tapkashike (p.38)	同左	同左	tapkashike (p.50)			tapkashike
chisanasank (p.38)	chisanasanke	同左	同左 (p.50)		北海道 2002	chisanasanke
upsh (p.40)	同左	同左	同左 (p.52)			upshi
matunitara (p.40)	同左	matunitarar	matunitara (p.52)		北海道 2002	matunitara
tektuipok (p.40)	同左	teknipok	tektuipok (p.52)	切替 1989		tektuipok
ranki mina (p.40)	rauke mina	rauki mina	同左 (p.54)	切替 1989	北海道 2002	rauki
okayash. (p.46)	同左	okayash,	okayash. (p.60)	切替 1989		?
raiepashash (p.46)	同左	同左	同左 (p.60)			raiepashash ㇿ。
kuune (p.46)	同左	kunne	kunne (p.60)		北海道 2002	kunne
eosineru (p.46)	同左	同左	同左 (p.60)	切替 1989	北海道 2002	esoineru
kane shiran. (p.52)	同左	同左	同左		北海道 2002	ㇿ は不要。
ainupito (p.56)	同左	同左	ainupito (p.72)	切替 1989		ainupito
opittano. (p.58)	同左	opittano	opittano. (p.74)	切替 1989		opittano,
to (p.60)	同左	同左	同左 (p.76)			too ㇿ。
„Hm (p.60)	同左	“Hm	“Hm (p.76)		北海道 2002	“Hm
chirakewehe (p.64)	同左	同左	同左 (p.82)		北海道 2002	chiraikewehe
ingarash (p.64)	同左	同左	同左 (p.82)		北海道 2002	ingarash
hoskino (p.64)	同左	同左	同左 (p.82)			hoshkino
ne ita ponrupneainu (p.68)	同左	ne ita ponrupneainu	ne ita ponrupneainu (p.86)	切替 1989		?
yetpo (p.70)	同左	petpo	petpo (p.88)	切替 1989	北海道 2002	petpo
itkash (p.70)	同左	itakash	itakash (p.88)	切替 1989	北海道 2002	itakash
eonnohetapne (p.70)	同左	sonnohetapne	sonnohetapne (p.88)	切替 1989	北海道 2002	sonnohetapne
unmosha (p.76)	同左	unmoshma	unmoshma (p.96)		北海道 2002	unmoshma
orum (p.76)	同左	orum	orum (p.98)	切替 1989		orum
nerokokai. (p.90)	同左	nerokokai.	nerokokai. (p.112)	切替 1989		nerokokai.
etutumpe (p.92)	同左	etuhumpe	etutumpe (p.112)	切替 1989	北海道 2002	etuhumpe
chipahun (p.92)	同左	chupahun	chipahun (p.114)		北海道 2002	chupahun
humpearke (p.92)	同左	hmppearke	humpearke (p.116)			humpearke
shioka un ainu (p.92)	同左	shioka un. ainu	shioka un ainu (p.116)	切替 1989		?
kotankornishpa (p.92)	同左	kotankornishpa	kotankornishpa (p.116)	切替 1989		kotankornishpa
chienupene (p.96)	同左	chienupetne	chienupene (p.120)	切替 1989	北海道 2002	chienupetne
rank (p.96)	同左	ranke	同左 (p.120)		北海道 2002	ranke
rorunso kata iwan (p.96)	同左	rorunso kata iwan	rorunso kata iwan (p.120)	切替 1989		?
irihumsehau (p.100)	同左	同左	同左 (p.124)			irihumsehau
erututte (p.100)	同左	同左	同左 (p.124)	切替 1989		erututte
ramakane (p.100)	同左	rammakane	同左 (p.124)			rammakane
iramno (p.100)	同左	isamno	iramno (p.126)		北海道 2002	isamno
chierameshinne (p.108)	同左	同左	同左 (p.136)		北海道 2002	chieramushinne
shiri (p.112)	同左	同左	同左 (p.140)			shir ㇿ。
hokanashimip (p.114)	hokanachimip	hokanashimip	hokanachimip (p.142)	切替 1989		hokanashimip
montumkiro (p.114)	montumkiro	同左	同左 (p.142)		北海道 2002	montumkiro
shikautapkurka (p.114)	同左	同左	同左 (p.142)		北海道 2002	shikantapkurka
shiri ne (p.116)	同左	shirine	shiri ne (p.146)	切替 1989		?
chisaokuta (p.118)	同左	同左	同左 (p.148)			chisawokuta ㇿ。
chieramishkar (p.118)	同左	chieramishkare	同左 (p.150)	切替 1989		chieramishkare
sat wa okere tane (p.122)	sat wa okere, tane	sat wa okere tane	sat wa okere, tane (p.152)	切替 1989		?
Wakkapo! ohai (p.122)	Wakkapo ohai!	Wakkapo! ohai	同左 (p.152)	切替 1989	北海道 2002	Wakkapo ohai!
sotkihi (p.122)	同左	sotkini	sotkihi (p.154)	切替 1989	註	sotkihi
ruwe ne. (p.124)	同左	ruwe ne	ruwe ne. (p.156)	切替 1989		?

註 切替 1989 はこの箇所について、初版と再補訂版の形式を取り違えている。

の手がかりが全くのゼロというわけではなく、特に著者の自筆ノート（「知里幸恵ノート」）が残っていることは『アイヌ神謡集』の研究上、大きな助けとなるものである。近年、自筆ノートのファクシミリ版（知里森舎2002）が刊行されて、その一端を容易に窺えるようになったことは大変喜ばしいことである。とはいえ、これまでに知られている『アイヌ神謡集』の本文と、自筆ノートの間には多くの相違があり、『アイヌ神謡集』の本文において誤植が疑われる場合でも、自筆ノートには該当箇所がない場合も少なくないことを考えると、自筆ノートも本文の確定に際して万能ではないことに注意しなければならない⁽⁴⁾。いずれにしても、『アイヌ神謡集』の用例だけでアイヌ語について断定的な結論を導き出すことはある意味でかなり危険なことであり、自筆ノート、同じ地域の他の資料（金成マツ筆録『アイヌ叙事詩ユーカラ集』1-8、三省堂、1959-1968、「金成マツ筆録ユーカラ・ノート」、北海道立図書館マイクロフィルム HM405など）の研究を同時に進める必要があると思われる。

3. 『アイヌ神謡集』における kane の用法と本文の解釈

以下では、まず、kane という接続助詞の用法を見ることにする。そして、『アイヌ神謡集』における kane の一般的な用法から、本文の誤脱を推定できる場合があることを述べる。

3. 1. 千歳方言における kane の用法

『アイヌ神謡集』の本文の研究の前に、まず千歳方言の kane について明らかになっている点を述べておく。佐藤（2002）によれば、千歳方言の kane には概略次のような用法が認められる⁽⁵⁾。

A. 極端な程度を表す kane

- (1) cik kane ku-poppetaasin⁽⁶⁾
 チク カネ クポペタアシン⁽⁷⁾
 垂れる ほど 私が一汗が出る

「(実際はともかく) したたり落ちるくらいに (ひどく) 私は汗が出た」

(4) 自筆ノートと『アイヌ神謡集』との異同については丸山隆司が既に早くから問題として取り上げ、具体的な指摘を行っている。その成果は丸山（2002）にまとめられている。

(5) これら四つの用法は言うまでもなく便宜的な区別であり、今後の研究によって異なる解釈を受ける可能性がある。また、仮にこれら四つの用法が概ね妥当なものだとしても、機能が互いに接近しており、結局は一つの用法に還元される変種である可能性がある。従って、ある kane の用例が、実際にこれらの用法のどれに該当するのかは決定が困難な場合があり、理論的には複数の解釈が可能な場合もある。

(6) 音素表記には次のような記号を用いる。/p, t, k, c, s, m, n, r, w, y, h, i, e, a, o, u/。

(7) 片仮名表記に際しては、音節末の p, t, k, s, m, n, r, w, y にそれぞれッ、ク、シ、ム、ン、ル、ウ、イをあてる。

- (2) i-neno kane an hekaci
 イネノ カネ アン ヘカチ
 私に—そのまま ほど ある 男の子
 「私そのままと言ってよいほどの (よく似た) 男の子」

上の例では、「したたり落ちる」、「私そのまま」のような事態は、現実の事態というよりはむしろ、「汗が出る」、「似ている」程度が、普通の基準を超えて甚だしいことを示すために、極端な事例として引き合いに出されたものに過ぎないと言える。このような、「ある極端な基準に到達する程度に甚だしく」という意味を表す場合に kane が用いられるのである。このように、kane はなんらかの基準に基づいて程度を叙述するために、次のような「ように」にあたる、比況的な表現 (益岡、田窪1992) として用いられることがある。

B. 比況的意味を表す kane

- (3) pon menoko mina kane i-y-ekaranke
 ボン メノコ ミナ カネ イ イェカランケ
 若い 女 笑う ように 私に—近づく
 「(見知らぬ) 若い女が笑っているような顔をして私に近づいて来た」⁽⁸⁾
- (4) sinkikaspa-an kane humas
 シンキカシパ アン カネ フマン
 疲れすぎ—私が ように 気がする
 「私は疲れすぎたように思った」
- (5) sirankes kane siran
 シリアンケシ カネ シラン
 夜明けになる ように 様子だ
 「夜が明けて来た様子である」

上の例は、極端な程度を表すAの場合との境界があまり明らかではないけれども、基準となる事柄がAほど極端な事例でない場合に対して kane が用いられている例である。「疲れた」、「夜が明け

(8) 「笑う」は、見かけだけでは必ずしも本当に笑っているのかどうか分からない行為なので、確証がない場合にはこの例におけるように程度の近似を表す kane が用いられる余地があるわけである。これに対して、toan kur anak minamina kor patek an kun ne「あの人は(ほがらかでいつも)笑ってばかりいる人だ」という例においては、実際に笑っていることが明白であるので、接続助詞に kane でなく、kor 「ながら、つつ」が用いられていると考えられる。

た」と断定するのではなく、「疲れた」、「夜が明けた」という基準に近い程度であることを *kane* を用いて表し、「疲れたようだ」、「夜が明けたようだ」という意味を表している。この場合は、単に、「ある基準を満たすに足りる程度に」という意味を表しているので、「ようだ」、「らしい」のような比況の意味に接近していると言える。

C. 婉曲的意味を表す *kane*

- (6) a-ahupte ciki he pirka somo ciki he pirka
 アアフフテ チキ ヘ ピリカ ソモ チキ ヘ ピリカ
 私が一入れる と か 良い ない と か 良い
 sekor *kane*, cise kor kur kowepekennu akusu
 セコル カネ チセ コル クル コウエペケンヌ アクス
 と ように 家 の 人 尋ねる と
 「家の中に入れても良いか、良くないか、というような事を家の主人に私が尋ねると」

このような事例は主として引用表現の後に現れる *kane* に関わるものである。これらはおそらく B の「比況的用法（～のように）」の一種とみなすことができるものであり、多くの場合、断定を避けた婉曲的な意味を表していると考えられる。

D. 同時性を表す *kane*

- (7) tasiro ka anpa makiri ka anpa *kane* oka wa ukohoyuppa
 タシロ カ アンパ マキリ カ アンパ カネ オカ ワ ウコホユッパ
 山刀 も 持つ 小刀 も 持つ まま いる て 走り回る
 「山刀も持ち、小刀も持ったままでいて、走り回った」

D の用法は、典型的には、*se* 「背負う」、*ani* 「持つ（単数形）」、*anpa* 「持つ（複数形）」のような「所持」を意味する動詞が前に来るものである⁽⁹⁾。この用法は、恐らく A の「極端な程度」を表す *kane* の用法と関係付けることが可能ではないかと思われる。*kane* の前にこれらの所持を意味する

(9) 静内方言では、*kane* は同時性、付帯状況を表す助詞として「持つ」を意味する動詞に限らず、広く用いられるようである（織田ステノ氏のご教示に基づく）。これに対し、千歳方言（及びおそらく沙流方言も）においては、同時性、付帯状況は、場合に応じて *wa*、*kor* のような別の接続助詞で表現されるのが一般的で、同時性の表現としては、*kane* は相対的に有標の形式のようである。なお、千歳方言においても所持を意味する表現以外に *utura-an kane wa* 「我々が一緒に行つて」のような例もあるが（中川裕氏の示教による）、この場合も「極端な程度」（実際はなかなかあり得ないが、ずーっと離れず一緒のままで）という解釈が一応可能である。とはいえ、なお検討を要する。

動詞が現れた場合、Aと同様に「通常では考えられない程度に」という事態が想定されているものと考えられる。すなわち、同じく「持つ」であっても、この場合は、時々は休んで荷物を下に置くこともあるというような可能性は全く排除された、極端な程度の「持つ」という動作が想定されているため、「持ったまま」のような意味が生じていると考えられる。

佐藤(2002)は、これらAからDの用法は、結局のところ、kaneに「(ある基準までの到達を表す)程度」のような意義を仮定することによって統一的に説明できるのではないか、という仮説を述べている。

3. 2. 『アイヌ神謡集』における kane の用法

調査の結果、『アイヌ神謡集』に現れる kane の用法は、一部を除いて千歳方言と非常によく一致することが明らかとなった。

まず、Aの極端な程度を意味する用法に一致する例としては、次のようなものがあげられる。

- (8) Poroshikupkur yaikokutkor yupu kane unkoonkami (岩18)⁽¹⁰⁾
ポロシクプクル ヤイコクツコル ユプ カネ ウンコオンカミ
老人 自分に帯 締める ようにして 私を礼拝する
「老人があたかも帯をきつく締め直すかのような仕草をして(恐懼して)私に礼拝した」(「老人はキチンと帯を締め直して」(岩19))

上の例では、「帯をきつく締める」は、実際の行為というよりはむしろ、恐縮の度が甚だしいことを表すための一種の比喩表現として用いられている点に注意すべきである。本当に帯を締め直す動作をしたかどうかは別として、「そうする程」、「そうしたと言っても過言でない程度に」恐縮して礼拝した、ということをオーバーに表現したものと考えられる。また、次のような例もある。

- (9) shinu kane reye kane ahup wa (岩28)
シヌ カネ レイエ カネ アフワ ワ
膝摺る ように 這う ように 入っ て
「膝を摺るほど、這うほど(それほど恐縮して)入って」(「いざり這いよって」(岩29))

上の例は、慣用的な表現で、勿論千歳方言にもあるが、やはり実際の動作をそのまま表しているというよりはむしろ、「(立ったままではなく)膝を摺って前へ進むくらい、這いつくばるくらい」、

(10) 岩波文庫版のページ数をこのように示す。なお引用にあたっては、スペースの取り方以外は原則として原文のままとした。また、ch、shは現在ではc、sと書かれるので、形式を引用する場合、両方の表記を並記することがある。

それほどに恐縮した、ということをおオーバーに述べた表現とすることができる。

これらの例に対して、次の例は「ようだ」のような、比況の意味を含んでいる例と考えられる。

(10) sancha otta mina kane ene itaki (岩60)

サンチャ オッタ ミナ カネ エネ イタキ

口先 所で 笑う ように こう 言うこと

「微笑するようにしてこう言った」(「ニコニコ笑って言うことには」(岩62))

上の例は、「笑い」が内部感情を表す行為であり、本来は第三者にはそれと断定できにくい行為であるために kane という比況の意味を含む表現が用いられていると考えられる。人間に悪事を働いたむくいで無惨な死に方をした狐の神のところへ、殺した人間がやって来て、いい気味だ、と悪口を浴びせる場面であるから、本当に笑っているというよりも、kane を用いることによって、「笑いにも似た皮肉な表情を浮かべている」、という有様を描いているものと考えられる。これに対して、本人が笑っていて、笑っていることが明らかな場合には、次のように kor 「つつ、ながら」が用いられている⁽¹¹⁾。

(11) Hawash chiki chiemina kor itakash hawe ene okai (岩86)

ハワシ チキ チエミナ コル イタカシ ハウェ エネ オカイ

声がるので 私笑う ながら 言うー私話 こう ある(事)

「そう言われたので私が笑いながら言ったことはこうだった」(「私は聞いて笑いながら言うことに」(岩87))

次に、婉曲を表す C の用法であるが、この点では千歳方言と『アイヌ神謡集』とでは違いが見られる。すなわち、千歳方言の kane の婉曲的用法は、主として sekor 「〜と」と結びついた sekor kane という引用表現に現れるが、これまでのところ、『アイヌ神謡集』には千歳方言の sekor kane と並行的な表現がみられない。『アイヌ神謡集』においては、引用の副助詞には sekor ではなく、ari という形式が用いられるが、千歳方言の形式から予想される *ari kane という形式は現れていないのである。この問題については後に触れる。

D の同時性を表す kane は『アイヌ神謡集』にもみられる。

(11) ちなみに、『アイヌ神謡集』では、chiemina kor が三例、chieminarushui kor が一例あるのに対し、mina kane が五例、emina kane が一例ある。すなわち、mina 「笑う(自動詞)」、emina 「笑う(他動詞)」という語について、主語が一人称の場合は kor で、主語が三人称の場合は kane という使い分けがなされているようにもみえる。例が少ないのでこれだけではなんとも言えないが、少なくともこれは千歳方言の kane の用法と矛盾しないものと言える。

- (12) cheputar muninchikuni ekupakane Chepkor Kamui otta hoshippa (岩102)
 チェプウタル ムニンチクニ エクパカネ チェプコル カムイ オッタ ホシツパ
 魚たち 腐れ木 くわえたまま 魚の 神 所に 戻る
 「魚たちは腐った木をくわえたまま魚の神の元に帰る」(「魚どもは腐れ木をくわえて魚の神の許へ帰る」(岩103))

この場合も、千歳方言の所持を意味する動詞と用いられた場合と同様、単に「所持して」、「所持しながら」という同時性を表しているのではなく、極端な程度に、「ずっと所持したまま」という誇張的な意味を表している可能性があると考えられる。

3. 3. ‘eramuka patek kane’の解釈について

さて、これまで述べて来たように、『アイヌ神謡集』における kane の用法は、概ね千歳方言と同様と言って良いものであることを述べてきたが、以下では、このような kane の用法に関する知識が、本文の難読個所の解釈に役立つのではないと思われる事例があることを指摘して置きたい。『アイヌ神謡集』には次のような kane を含む例文がある。

- (13) atuichakchak eramuka patek kane okai (岩114)
 アトゥイチャクチャク エラムカ パテック カネ オカイ
 ごめ ? ばかり ように いる
 「ごめ(鳥)が所在なげにしている」(「海のごめは所在無げにしている」(岩115))

上の例における eramuka という形式が問題である。和訳が与えられているので、意味は明白であるけれども、これまでのところ、まず参照すべき主要な辞書類にもこの形式は採録されていない(Batchelor1938、知里1975、1976、久保寺1992、中川1995、田村1996、萱野1996)。のみならず、この形式は容易に形態素に分析することができない。eは「～について」、ramu は「心」に該当する可能性があるけれども、最後の ka という要素が不明のまま残ってしまう。それでは、この個所はどう理解すべきなのだろうか。ここで問題となるのが kane の用法である。

まず、kane が接続助詞だとすると、千歳方言では副助詞 patek は kane に限らず接続助詞の前には立たない。patek が現れるとすれば次のように接続助詞の後に現れる。すなわち、patek kane のような例はない。

- (14) toan kur anakne hawke kur ne kusu,
 トアン クル アナクネ ハウケ クル ネ クス
 あの 人 は 弱い 人 である ので

ponno ponno siyeyesiyeye kane patek iki
 ポンノ ポンノ シイエイエシイエイエ カネ パテック イキ
 少し 少し 病気する ように ばかり する

「あの人は体が弱い人なので、(いつも必ず) ちょっとした病気を繰り返してばかりいる」

『アイヌ神謡集』においても、kane patek の用例こそないが、patek は接続助詞（この場合は kor 「て、つつ」）の前ではなく、次のように後ろに現れるようである。

(15) newaanbe chiemina kor patek okayashpe nekushu (岩64)
 ネワアンペ チエミナ コル パテック オカヤシベ ネクス
 それ 私が笑う て ばかり 私がいるもの であるので

「それを私は笑ってばかりいるものだから」(「それを私は笑うのを常としていたので」(岩65))

上のような事実から、eramuka patek kane の patek を副助詞、kane を接続助詞とする解釈は、言語学的にみて再考の余地のあることがわかる。そこで考えられるのは、何らかの誤脱がこの箇所でき起っているのではないか、という可能性である。既に述べたように、『アイヌ神謡集』の本文には、容易に指摘できるだけでも少なくない誤植があり、この場合にもその種の誤脱が関与している可能性は決して低くないものと考えられる⁽¹²⁾。ここで手がかりとなるのは、原文に付された和訳と、kane の用法である。既に見たように、kane にはいくつかの用法があるが、「所在なげにしている」という訳語から、引用表現ではないので、婉曲用法はひとまず考慮外においてよいと思われる。また、所持の意味でもないので、この用法もひとまず除くことにする。すると、残るのは極端な程度を表す用法と比況の用法の二つである(ちなみに、著者による「所在なげにしている」という訳語は、kane に比況的な意味があるという筆者の仮説と矛盾しないものである)。なお、本文のこの部分は、鳥のゴメが、海の神に、人間は海の神の恵みを粗末にしている、けしからんですげ、あんな連中にプレゼントをくれてやる必要などありませんぜ、と讒言したのに対し、海の神は、俺が人間にやったものを人間がどうしようと自由ではないか、と逆にゴメをたしなめたので、勢い込んで注進に及んだゴメが氣勢を殺がれてしまう、という場面である。おそらく、eramuka patek kane と書かれた表現は、本来、このようなゴメの気持ちを的確に表現した言い回しであったに違いない。

これらの観点から総合的に考えて、二通りの案が考えられると思う。一案として考えられるのは、おそらくこの箇所は、印刷所に提出された原稿では、eramukapatek kane okai となっていたのではないかという推定である。それが誤植によって eramuka patek kane のように、eramuka と patek が誤って分離して印刷されたために、eramuka という解釈困難な形式が生まれたものと考えるのであ

(12) もっとも、この場合、「知里幸恵ノート」3(知里森舎(2002:74))には問題の形式の自筆の例が見られるが、他の場合にもそうであるように、Eramuka と patek の間は切れているようにもつながっているようにも見え、判断が微妙であり、これだけではやはり決定的な手がかりとはならない。

る。それでは、*eramukapatek* とはどのような形式なのであろうか。*eramuka* 同様、**eramukapatek* という形式も他の辞書類等によっては例証されていないので、現時点では単なる憶測に過ぎないが、この形式は *e-ramu-kapatek* という構造に該当するものと思われる。*e-*は「～について」、*ramu* は「心」であるが、**kapatek* はおそらく「急激にぺちゃんこになる、平らになる」という意味の形式である可能性がある。**kapatek* という形式はやはりこれまでのところ実証されていないが、千歳方言には *retatek* 「急に白くなる」という形式があり⁽¹³⁾、これは明らかに *retar* 「白い」と関係付けられる形式である。また、知里 (1962) [1976 : 61] には *mimisiratek* 「さば」という形式が採録されており、この形式における *siratek* を知里は *sirar-tek* 「しまっている」と分析している⁽¹⁴⁾。類例が少なく、さらに検討が必要であるが、*retar* : *retatek*、*sirar* : *siratek* のような例があるとすれば、*kapar* 「薄い」に対して **kapatek* 「急に薄くなる」という形式が存在する可能性はあると思う。結局のところ、**eramukapatek* は、文字通りには「～について (逸っていた) 心が急にぺちゃんこになる」、という意味の形式である可能性がある。この解釈は、文脈及び「所在なげにしている」という和訳ともよく一致するばかりでなく、*kane* の用法のうち、極端な程度を表す用法と極めて良く適合する。「心がぺちゃんこになる」ことは、普通はあり得ないような極端な状況を指している、比喩的な表現の一種と考えられるからである。

なお、もう一つ、別な誤植の可能性も考慮する必要があるかもしれない。すなわち、『アイヌ神謡集』には、*sapakaptek* 「扁平頭」(岩146) という形式が現れ、ここに含まれている *kaptek* という形式は、和訳から「扁平である、ぺちゃんこである」という意味を表すと考えられる。事実、服部 (1964 : 135) では美幌方言で「ペちゃんこになる」という意味の形式として記録され、また田村 (1996 : 279) でも、「ペちゃんこになる」という形式として記録されている。従って、本来は **eramukapatek* と書かれていたものが、一語を二語に分離するという誤植と、誤って *a* を挿入する、という二つの誤植が重なった結果、*eramuka patek* という表記となった、と考えるのである。しかし、この案は、*kaptek* という実証された形式に基づいている点は良いが、実際に分離して書かれているかどうかは別として、自筆草稿でも *eramukapatek* でなく、*eramukapatek* のように、*p* と *t* の間に *a* が明白に書かれている、という事実を、うまく説明することができない、という点に難点がある。もっとも、著者自身が書き誤りや思い違いをして、それがなんらかの原因で最後まで残ってしまった、という可能性も皆無ではないと思われるので、この問題の決着のために、関連する形式を実証するような資料、あるいは印刷原稿そのものが今後出現することを切に願うものである。

3. 4. ‘ari an rekpo chiki kane’の解釈について

次は有名な冒頭部分であるが、ここにも難しい問題が隠されている。

(13) 白沢ナベ氏のご教示による。

(14) この形式の存在については本田優子氏のご教示を得た。

- (16) “Shirokanipe ranran pishkan, konkanipe
 シロカニペ ランラン ピシカン コンカニペ
 シロカニペ ランラン ピシカン コンカニペ
 ranran pishkan,” arian rekpo chiki kane
 ランラン ピシカン アリアン レクポ チキ カネ
 ランラン ピシカン とある 歌 私する
 petesoro sapash aine, ainukotan enkashike
 ペテソロ サパシ アイネ アイヌコタン エンカシケ
 川沿いに 下る て 人間の村 上
 chikush kor shichorpokun inkarash ko (岩10)
 チクシ コル シチョルポクン インカラシ コ
 私が通る て 自分の下を 私が見る と

「シロカニペ ランラン ピシカン コンカニペ ランラン ピシカンという歌を私はしながら川沿いに下って、人間の村の上を通過して、下を私が見ると」（「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに。」という歌を私は歌いながら流に沿って下り、人間の村の上を通りながら下を眺めると）（岩11）

この個所で、なぜ *rekpo chiki kane* であるのに、*chikush kor* なのか、不思議である。両者の違いはなんだろうか。しかし、これまでの *kane* に関する議論によって、この個所も解釈することが可能ではないかと思う。すなわち、この場合、*kane* は一種の比況を表しているもので、厳密には「歌いながら」ではなく、「歌うようにして」という意味を表現しているものと考えられる。なぜかと言うと、シロカニペランランピシカン、という人間の言葉そのものをフクロウが実際に発しているわけではないので、「あたかもそのように」というニュアンスを持つ *kane* を用いて表現しているのであろう。ここでの *kane* の用法は事態に対する話者の態度に関わるもので、概言のモダリティー（寺村1984：223）の一種とみなすこともできよう。また、この場合、*kane* が概言のスコープとして取っているのは直前の要素ではなくて、実は「シロカニペランラン…」という発言内容そのものであると考えられる。これは沼田（1986：150）が日本語の取り立て助詞に関して述べている「前方移動スコープ」と類似した機能である⁽¹⁵⁾。つまり、『アイヌ神謡集』には、千歳方言の *sekor kane* 「などと」に対応する **ari kane* という形式が見られないが、*kane* にこのような離れたスコープに作用する機能があると考えればこの事実も説明が付く。これに対して、*chikush kor* 「私が通ると」は、比況で表現する必要のない現実の動作なので、*kane* を用いず、*kor* を用いているのであろう。

(15) *kane* の副助詞的な性質については田村（1996：274）等でも指摘されている。

4. 「半母音挿入」と接辞の分類

次に、Sato (2003) で扱われている「半母音挿入」という現象が『アイヌ神謡集』ではどのような状況を示しているのかを述べることにする。この点に関しては、千歳方言と『アイヌ神謡集』の間には、いままで気が付かれていなかった大きな差異のあるらしいことが明らかとなった⁽¹⁶⁾。

4. 1. 千歳方言における半母音挿入と接辞の分類

佐藤 (1996b)、Sato (2003) に基づいて、ごく単純化して述べるならば、千歳方言では、i- (一人称複数目的格接辞⁽¹⁷⁾、不定人称目的格接辞)、si-「自分を」のような接辞の後に母音 (e、a、o、u) で始まる語幹が後続する場合には y が、u-「互いを」の後に母音 (e、a、o) で始まる語幹が後続する場合には w が挿入子音として母音間に挿入されることが知られている。

(17) i-y-e

イイエ

私を一挿入子音一食べる 「(彼が) 私を食べる」

(18) i-y-oka

un

イヨカ

ウン

私を一挿入子音一後ろ へ 「私の後ろの方へ」

(19) si-y-akkarire

シヤッカリレ

自分を一挿入子音一通させる 「自分を (誰かに) 通させる、」

(20) si-y-oka

un

シヨカ

ウン

自分を一挿入子音一後ろ へ 「自分の後ろの方へ」

(16) この現象については少なくともこれまでの『アイヌ神謡集』の研究において問題になったことはなく、むしろ無視してかまわない、という立場が「言語学的、専門家的」ということになっているようであるが、このような考え方は (色々と問題はあにせよ) 知里幸恵の原表記が与える情報を一方的に遮断し、無視するものであり、学問的観点からは大いに批判の余地があると思う。

(17) i- は基本的には包括的一人称複数目的格を意味するが、口頭文芸のテキストにおいては、単数の指示対象にも用いられる。

- (21) u-w-omare
 ウウォマレ
 互いを一挿入子音一入れる 「片づける」

- (22) u-w-oyak ta
 ウウォヤク タ
 互いを一挿入子音一別の場所 に 「別々に」

これらの接頭辞の場合と異なり、語幹の合成（抱合）においては、i+母音、u+母音が生じても、半母音の挿入は起こらない。

- (23) ku-turi-ecipo (*ku-turi-y-ecipo)
 クトゥリエチポ
 私が一棹一で船をこぐ 「私が棹で操船する」

- (24) e-ramu-an (*e-ramu-w-an)
 エラムアン
 ～について一心一ある 「わかる」

以上から、千歳方言においては、i-「我々を、私を、ものを」、u-「互いを」、si-「自分を」は後続の語幹との結びつきが強いために半母音挿入が行われるが、語幹の合成（抱合）の場合は、語幹の独立性が高いためにこのような半母音の挿入が行われないのだ、という仮説が立てられる。

4. 2. 『アイヌ神謡集』における半母音挿入と接辞の分類

『アイヌ神謡集』において、千歳方言と同じi-、si-、u-という接辞が半母音挿入においてどのような状態であるかを調べた結果、次のようであった⁽¹⁸⁾。

- (25) 接頭辞 i-の後に母音で始まる語幹が後続する例
- | | | |
|------------|--------------|---------------|
| iyuta | イユタ | 「搗物をする」(岩49) |
| uniyuninka | ウニユニンカ | 「私を苦しめる」(岩60) |
| iyeutanne | イイエウタンネ (2例) | 「仲間入りする」(岩12) |

(18) 「知里幸恵ノート」(知里森舎2002)の状況は『アイヌ神謡集』と必ずしも同じではない。ieyoko(1巻 p.6、一人称)、ieuwetushmak(1巻 p.8、一人称)、iuturwende(3巻 p.77、不定人称)、iokapushpa(3巻 p.132,p.134、不定人称)のような挿入の起こらない例がある一方で、eiyetushmak(1巻 p.10、不定?、一人称?)、iyeutanne(1巻 p.6、不定)、iyuta(1巻 p.34、不定)、iiyuninka(1巻 p.44、一人称)のように挿入の起こっている例もある。

eiyetushmak	エイエトウシマク	「おまえが先がけする」(岩16) ⁽¹⁹⁾
iyoshi	イヨシ	「後から」(岩14)
iyoshino	イヨシノ	「後から」(岩14、76)

これらの例から明らかなように、『アイヌ神謡集』においても千歳方言同様、i- は y の挿入を引き起こすと言って良い⁽²⁰⁾。

(26) 接頭辞 shi-(si-) (「自分を」) の後に母音で始まる語幹が後続する例

『アイヌ神謡集』における再帰的接頭辞 shi-(si-) の後に母音で始まる語幹が後続する例は以下の通りである。

shiaworaye	シアウォライエ	「入ってくる」(岩98、100)
shiaworaipa	シアウォライパ	「入ってくる」(岩122)
shienka	シエンカ	「上」(岩12)
shietok un	シエトク ウン	「自分の行手を」(岩36)
shietokun	シエトクン	「自分の行手を」(岩46)
shiotokpakor	シオコツパコル	「砂吹雪を立てながら」(岩14)
shiookote	シオコテ	「砂吹雪をたてながら」(岩16)
shioka un	シオカ ウン	「後ふりかえって」(岩72、116)
chishiokote	チシオコテ	「(土吹雪を) 立てる」(岩80)

上の例から明らかなように、千歳方言と異なり、『アイヌ神謡集』では、再帰接頭辞 shi-(si-) の後に母音で始まる語幹が立つ場合に、半母音 y が挿入された例が全く見られないことがわかる。千歳方言について立てた仮説がもし『アイヌ神謡集』についても当てはまるとすれば、再帰接頭辞 shi-(si-) は、『アイヌ神謡集』においては、i- や u- に比べると、後続の語幹からの独立性が相対的に高い可能性があることになる。この点については後で再び触れる。

(27) 接頭辞 u- 「互いを」 の後に母音で始まる語幹が後続する例

euweshinot	エウウェシノッ	「遊んでいる」(岩10)
------------	---------	--------------

(19) この形式は、e-i-y-e-tushmak のように分析して、「おまえが我々を先がけする」、あるいは「おまえが人を先がけする」という意味の形式であると考えておく。

(20) ただし、iokapushpa という例が2例あり、語頭の i は接頭辞 i- と見られるが、y の挿入が起こっていない。これは当初の予測に反する例である。あるいは、この i- は「私達を、私を」を意味する人称接辞とみて、『アイヌ神謡集』では人称接辞では挿入が起こらないのだ、とする可能性もある。このことは、人称代名詞 chiokai が決して *chiyokai と表記されないことを考慮すれば、全く可能性がないわけではない。他方、raiypash という形式の y も、この形式の構成素が rai 「死ぬ」、epash 「～で走る」(瀕死の状態で走り回る) であると考えた場合、挿入と見ることができるともかもしれない。しかし、その場合、rai は語幹であるので、なぜここで y の挿入が起きるのか、体系的な観点からは説明が困難である。

uweunupa	ウウェウヌパ	「つがえる」(岩12)
uweunu	ウウェウヌ	「つがえる」(岩12)
unuwetushmak	ウヌウェトウシマク	「競走する」(岩14)
chieweneusar	チエウウェネウサル	「我々が語り合う」(岩26)
uweutanne	ウウェウタンネ	「連れる」(岩28)
uwekatairotkean	ウウェカタイロツケアン	「なかよくする」(岩30)
uwekatairotke	ウウェカタイロツケ	「なかよくする」(岩30)
uweneusarash	ウウェネウサラシ	「私が話し合う」(岩30)
uwekatairotke	ウウェカタイロツケ	「なかよくする」(岩32)
uweushi	ウウェウシ	「出合ったところ」(岩52)
chiuweshuye	チウウェスイエ	「私が(笑いを)浮かべる」(岩54)
chiuweshuye	チウウェスイエ	「私が(笑いを)浮かべる」(岩54)
chiuweshuye	チウウェスイエ	「私が(笑いを)浮かべる」(岩58)
uweunu	ウウェウヌ	「つがえる」(岩80)
uwekarpa	ウウェカルパ	「集まる」(岩82)
chiuweunu	チウウェウヌ	「私がつがえる」(岩112)
chiuweshuye	チウウェスイエ	「私が美しいと思う」(岩120)
uweunu	ウウェウヌ	「つがえる」(岩138)
chiuweunu	チウウェウヌ	「私がつがえる」(岩140)
uweunu	ウウェウヌ	「つがえる」(岩140)
chiuweunu	チウウェウヌ	「私がつがえる」(岩140)

上の例から明らかなように、接頭辞 u-「互いを」が母音で始まる語幹に後続される場合、千歳方言と同様、常に w が挿入される⁽²¹⁾。

5. 「第三類の動詞」と接辞の分類

佐藤 (2001)、佐藤 (2002b) は、アイヌ語学において従来、「第三類の動詞」⁽²²⁾、「連他動詞」⁽²³⁾、「連動詞」⁽²⁴⁾ などと呼ばれて来た種類の動詞的形式について、千歳方言の例を基に考察した結果、この種の形式の存在は、アイヌ語における抱合に関わる制約に依存しているという仮説を提案した。

(21) もっとも、「知里幸恵ノート1」(知里森舎2002: 22)の『アイヌ神謡集』関係部分には一例だけ uekatarotke という例が現れている。

(22) 金田一 (1936)、知里 (1936) による。

(23) 田村 (1988) による。

(24) 中川 (1995) による。

以下では、『アイヌ神謡集』においてこの種の形式がどのような特徴を示すかを明らかにする。概略的に言って、『アイヌ神謡集』は、千歳方言とはある意味では全く異なる、極めて興味深い特色を示す。

5. 1. 千歳方言における「第三類の動詞」と接辞の分類

千歳方言を例として、「第三類の動詞」の概略を示す。佐藤 (2001 : 62, 67) が述べているように、このタイプの動詞は二語からなるが、一個の動詞のようなまとまった意義を表す。それらの多くは位置名詞 (または身体名詞) と他動詞からなる。人称接辞が名詞に接合した場合、名詞句と動詞句は別々に分離して二語となる。

- (28) i-ka a-oyki
 イカ アオイキ
 私を一上 人が一活動する 「人が私を世話する」

- (29) i-par a-oyki
 イパル アオイキ
 私を一口 人が一活動する 「人が私を養う」

これに対して、佐藤 (2001 : 67) が指摘しているように、位置名詞や身体名詞に派生接辞が接合した場合は次のように動詞に抱合されて一語となる。

- (30) i-ka-opas-an
 イカオパサン
 人を一上一走る一私が 「私は人を救う」

- (31) a-si-ka-opaste
 アシカオパシテ
 人が一自分を一上一走らせる 「人が自分を (誰かに) 救わせる」

- (32) yay-par-oyki
 ヤイパロイキ
 自分を一口一活動する 「我が身を養う」

佐藤 (2001 : 68-69) は、人称接辞の接合した形式が抱合されないのは、佐藤 (1992b : 198-199) が既に指摘している、限定性の高い名詞句を抱合することができない、というアイヌ語の抱合の制

約によるものだ、と述べている⁽²⁵⁾。

5. 2. 『アイヌ神謡集』における「第三類の動詞」と接辞の分類

『アイヌ神謡集』で特に注目されるのは、千歳方言では抱合されて現れる派生接辞の接合した名詞句が、抱合されずに次のように動詞の外に現れている例のあることである。

(33) shienka chikushte (岩12)

シエンカ チクシテ

自分の上 私が通させる

「私が自分の上を通させる」(「上を通したり」(岩13))

(34) shichorpok chikushte (岩12)

シチョルポク チクシテ

自分の下 私が通させる

「私が自分の下を通させる」(「私は下を通したり」(岩13))

(35) shikautapkurka⁽²⁶⁾ chieshitaiki (岩142)

シカンタップクルカ チエシタイキ

自分の肩の上 私が叩きつける

「私が自分の肩の上に叩きつける」(「肩の上まで引っ担ぎ」(岩143))

三例のみであるので、これらの例だけから一般化することは危険であるが、これらがいずれも再帰接頭辞 shi- の接合したものである点は恐らく偶然ではないと思われる。千歳方言の i-ka a-oyki 「人が私を世話する」のような形式と比較すれば明らかなように、これらの例は派生接辞ではなく、人称接辞が接合したときと同じパターンを示している。すなわち、この場合、shi-(si-) は、あたかも人称接辞であるかのような位置に現れている。この点は、千歳方言の a-si-ka-opaste と比較すればわかるように、si- が完全に語の内部の派生接辞の現れる位置に現れている場合と対照的である(*si-ka a-opaste という例は見つかっていない)。これまでのところ、千歳方言では si- の接合した名詞が動詞から独立した目的語となっている例は見つかっておらず⁽²⁷⁾、千歳方言からみると、『アイヌ神謡集』にお

(25) ku-teke-pase 「私の手が重い(=年を取って自由がきかなくなる)」のような所属形を抱合しているかに見える例は、この制約に対する真の反例ではないことに注意すべきである。この場合の teke 「手」という形は、たまたま限定的な意味を表す所属形 teke と同形であるけれども、teke-pase-an 「私達は手が重い」、のような形式を考慮すれば、所属形ではなく、動詞価を増やす手段として用いられた、別の形式とみなすべきであることがわかる。

(26) shikantapkurka の誤植。

(27) これに対し、si-+位置名詞は(20)におけるように格助詞とは共起できる。この差は今後の研究課題であるが、si-+位置名詞+格助詞という構造を持つ形式は、実は句ではなく、単独の副詞(一語)とみなすべきものであることを示すものかもしれない。

けるこの種の例は、極めて異質な形式である可能性がある。なお、沙流方言においても、si-は千歳方言同様、派生接辞の現れる位置に起こるようである。下の例は、上の『アイヌ神謡集』の例と同じ意味を表す沙流方言の形式であるが、si-を含む位置名詞は動詞に抱合された形式として現れている。

(36) a=siyenkakuste

アシエンカクシテ (田村2002 : 74)

(37) a=sicorpokkuste

アシチョルポククシテ (田村2002 : 74)

以上を要約すれば、「第三類の動詞」における si- の特徴に関する限り、『アイヌ神謡集』の shi-(si-) は文法的に人称接辞と同じ位置に現れることができるのに対し、千歳方言や沙流方言ではこの場合、si- は派生接辞として扱われている、ということが出来る。ちなみに、金成マツ『アイヌ叙事詩ユーカラ集』には、千歳方言や沙流方言と同様、shi-(si-) が派生接辞の位置に現れている例がある一方で、『アイヌ神謡集』と同様、人称接辞の現れる位置に起こっている例がみられる。

(38) ashikakushte

アシカクシテ

「我が身にかけて」(金成、金田一1964 : 64)

(39) ashienkaotte

アシエンカオotte

「我が上におおいかぶさる」(金成、金田一1963 : 419、金成、金田一1966 : 224)

(40) ashisamomare

アシサモマレ

「わきにかたずけて」(金成、金田一1965 : 293)

(41) shikantap kurka aneterkere

シカントap クルカ アネテルケレ

「両肩の上になれ跳ねとばし」(金成、金田一1963 : 185、金成、金田一1965 : 217)

(42) shikantapkurka aneshitaiki

シカントapクルカ アネシタイキ

「我が肩の上になれ投げあげ」(金成、金田一1964 : 237)

このように揺れのある金成のテキストにおける例をどのように位置付けるかは問題であるが、金成マツが知里幸恵の叔母であることが周知の事実であることからすれば、少なくとも shi-(si-) が人称接辞の位置に現れている『アイヌ神謡集』の例は、他に例証のない孤例ではない、と言うことはできるであろう。

では、このような、shi-(si-) が人称接辞であるかのような位置に現れる『アイヌ神謡集』や金成の例をどのように解釈すべきであろうか。ここで思い起こされるのは、既に検討した「半母音挿入」における『アイヌ神謡集』の shi-(si-) の示す特徴である。千歳方言や沙流方言では、si- は母音で始まる語幹に接合する場合、y の挿入を引き起こしたが、『アイヌ神謡集』では shi-(si-) は y の挿入を引き起こさなかった。このことは、『アイヌ神謡集』において、shi-(si-) が、半母音の挿入を引き起こす i- や u- と異なるレベルの接頭辞に分類される可能性を示唆するものであるが、ここで見てきた文法的な特徴も、この見解と矛盾しないものであるということが出来る⁽²⁸⁾。

6. wa an の用法と ‘tukan wa ankur’ の解釈

次に、完了を意味する wa an という形式についてみることにする。『アイヌ神謡集』には、次のような例が現れるが、実はここで用いられている wa an 「～ている」という形式の用法には問題がある。

(43) kamui chikappo tukan wa ankur (岩10)

カムイ チカッポ トゥカン ワ アンクル

神 小鳥 射る て いる人

「神の小鳥を射ている(?)人」(「神様の鳥を射当てたもの」(岩11))

この例では、wa an という、結果の存続を表す形式が tukan 「射当てる」という他動詞と共に用いられているが、tukan wa an に修飾されている kur 「人」の文法的資格は明らかに tukan 「射当てる」の主語であると同時に an 「いる」の主語でもある⁽²⁹⁾。ところで、対象に状態や位置の変化を

(28) 千歳方言、沙流方言は si- の接合した位置名詞を抱合できるので、si- の人格的な性格はそれほど顕著ではないと言える。他方、これらの方言においても位置名詞は人称変化を行うが、si- は人称接辞と同じ位置に立ち得、統語的な機能を示すので、やはりこれらの方言においてもこの点で si- は人称と共通する特徴を一部保持していると言える。なお、副詞句中の si- が主語と照応し、統語的な性質を示すという点については佐藤(1995)に指摘がある。

(29) もっとも、アイヌ語の wa で結ばれた二つの節の主語は同一である必要はないから、例えば okkayo itanki opici wa kone 「男がお腕を(手から)放したら割れた」(作例)も可能と思われる。この場合、okkayo を関係節化して itanki opici wa kone okkayo 「お腕を(手から)放したら割れた男(??)」とすることがもし可能であるとすれば、(43)もあり得る、ということになるかもしれないが、いまのところ事例は見いだされていない。

与える他動詞⁽³⁰⁾が wa an と共に用いられている確実な例は、『アイヌ神謡集』ではこの他に一例しかみられない。

- (44) Ainupito arewaan ku (岩66)
アイヌピト アレワアン ク
人間 置いてある 弓
「人が置いてある弓」(「人間が置いた弓」(岩67))

上の例では、修飾されている ku「弓、わな」の文法的資格は、今度は明らかに are「置く」の目的語であると同時に、an「ある」の主語でもある。これだけではあまりにも例が少ないので、wa an について千歳方言ではどのような状態なのか、例を探してみると、対象の状態や位置の変化をもたらす他動詞と wa an が共に用いられて、しかも他動詞と an の主語が一致するような例は、それほど一般的とは言えないようである。強いて挙げれば以下のようなものがあげられるが、これらは対象の状態や位置の変化に着目した動詞というよりはむしろ、動作完了後の主語の状態(広い意味での物の所持)に着目した動詞と見なすべきものであろう。

- (45) k-ani wa k-an
カニ ワ カン
私が持つ て 私がいる 「私が持っている」
- (46) e-mi wa e-an
エミ ワ エアン
おまえが着る て おまえがいる 「おまえが着ている」
- (47) ku-nuyna wa k-an
クヌイナ ワ カン
私が隠す て 私がいる 「私が隠している」

(30) ここで、tukan を対象に変化を与える動詞、と断定してしまうのは早計かもしれない。例えば、後に述べるように、tukan を獲得行動とみて、これを物体の所持に至る、主語の状態に着目するタイプの動詞とみれば wa an と共起しても不思議でない、と考えることもできる。しかし、これまでのところ、tukan が wa an/oka と共起し、しかも主語の状態を表しているような例は参考文献にあげた主要な辞典類、筆者の採集資料のいずれにも該当する例を見いだすことができない。また、rayke「殺す」、koyki「捕る」のような同様な文脈で用いられる動詞に関してもいまのところ例がない。さらに、tukan を「狙う」のような nukar「見る」と同様、主語の状態に着目する動詞(後述)と見ることも可能であるが、その場合には「獲った人」ではなく、「今、現に狙うという動作を継続中の人」という意味になる可能性が大きく、ここの文脈と合わない。

- (48) ku-resu wa k-an
 クレス ワ カン
 私が飼う て 私がいる 「私が飼っている」

また、他動詞と wa an が共に用いられた例としては、他に次のような例もある。

- (49) ku-tere wa k-an
 クテレ ワ カン
 私が待つ て 私がいる 「私が待っている」

- (50) ku-nukar wa k-an
 クヌカル ワ カン
 私が見る て 私がいる 「私が見ている」

上の例は、動作の開始そのものが、直接的な結果として、主語のその場所での滞在を意味するので、この場合は「動作完了後」ではなく、「動作開始完了後」ではあるけれども、やはり問題の時点以降の主語の状態に着目するタイプの動詞の例と言ってよいであろう。これに対し、明白に目的語の結果状態に着目するタイプの動詞と wa an が共に用いられた場合には、次のように、他動詞の目的語が an の主語になるのが一般的なようである⁽³¹⁾。

- (51) ku-noyakar wa ku-suwe wa ku-satke wa oka
 クノヤカル ワ クスウェ ワ クサッケ ワ オカ
 私がヨモギ取りをする て 私が煮る て 私が干す て ある
 「私がヨモギ取りをして私が煮て干してある」

以上は千歳方言の事例であるので、『アイヌ神謡集』の事例にそのまま当てはめてよいかどうかは問題であるが、tukan がいわば目的語の結果状態に着目する典型的なタイプの動詞であると思われるにもかかわらず、この場合は主語の結果状態を表す wa an が後続しているのは、『アイヌ神謡集』において他動詞と wa an が用いられた例が極めて少ないだけにより一層目を引く例と言わなければならない。

現段階では全くの憶測に過ぎないけれども、この箇所には、ひょっとすると誤植が含まれているのではないだろうか。では、tukan wa an kur がおかしいとすれば、どのような代案があり得るだろうか。結論として、筆者は、この箇所は、元原稿では、tukan awan kur であった可能性がある

(31) これまでのところ反例はないが、例そのものがそれほど多くないので、今後なお、検討が必要である。

思う⁽³²⁾。この *awan* という形式はたとえば次のように用いられて、「その時点ではすぐにはわからなかったが、後で判明した」という意味を表す。

(52) *Okikirmui kamui rametok ne ruwe ne awan* (岩72)

オキキルムイ カムイ ラメトク ネ ルウェ ネ アワン

オキキリムイ 神 勇者 である の である た

「オキキリムイという神の勇者であったのだった」(「オキキリムイ、神のように強い方なのでありました」(岩73))

従って、*tukan awan kur* は、「射当てたことが後になって判明した人」という意味になるであろう。皆で鳥を射て、誰かが当てても、すぐには誰が射たのかわからないのが普通であろう。落ちてきた鳥を拾い上げて、刺さっている矢を調べて、その時点で誰が射当てたのか初めて確定する、という場面がここでは想定されていたのではないだろうか。

7. 検討が必要と思われる他の個所について

本文には、以上の他にも、多数の難解な個所があり、筆者の非才をもってしてはどうにもならないものがそれらの大部分を占める。とはいえ、以下では、いくつかの個所について多少の私見を述べることにする。

7. 1. ‘chipapa’について

chipapa 「強者」は、『アイヌ神謡集』の冒頭部分の有名な個所に現れる単語であるが、筆者には長年疑問であったものである。この語は主要なアイヌ語の辞典類には記載がない⁽³³⁾。管見の及ぶ限りでは『アイヌ神謡集』以外での出現例がないのである。この語を分析するとすれば、*chipa* 「祭壇」と *pa* 「頭」という二つの要素からなる語、という解釈がまず思い浮かぶ。儀礼の際に、祭壇の最上位で祈る人、というような意味なのだろうか。しかしながら、知里幸恵の出身地である幌別では、祭壇のことは *nusa* と言ったらしく⁽³⁴⁾、*chipa* という語があるのかどうか、今のところ未確認である。

ところで、最近、偶然にもこの語形と関連があるかもしれない語を、古いアイヌ語の記録の中に発見したので報告する。酒田市立光丘文庫所蔵の「蝦夷記」という写本(寛政七[1795]年写)の中に「ベチャチャ 上ツ方ト云事」とあるのを見いだした。この形は、**pecaca* のようなものと考え

(32) 同種の誤植の例としては、*eosineru* が *eosineru* となっている例がある(表1参照)。

(33) 知里(1954)[1975:540]には「ホロベツ *chipapa* 強者」、久保寺(1992:46)にも「*chipapa* 強者」の記載があるが、これらは『アイヌ神謡集』から採録されたものである可能性を否定できない。

(34) 北原次郎太氏のご教示による。

えられるが、『アイヌ神謡集』の chipapa と、一種のメタテシス（音転置）によって結び付けることが可能かもしれない。もっとも、万が一の可能性ではあるが、nishpa の誤植である、という可能性もあるのではないだろうか。博雅の士のご教示を得たいものである⁽³⁵⁾。

7. 2. ‘hotkei nani etoro hawe meshrototke’について

次の例をみよう。

(53) hotkei nani etoro hawe meshrototke (岩20)

ホッケイ ナニ エトロ ハウエ メシロトツケ

寝る事 すぐ いびき 声 鳴り響く

(「寝ると直ぐに高いびきで寝入ってしまいました」(岩21))

この個所の hotkei という形がよくわからない（ちなみに「知里幸恵ノート」1巻、p.12では hotke ko）。nani は副詞であるから、hotkei の述語になれない。しかし、金成、金田一（1964：54）には、hotkei-moire etoro hawe komeshrototke「寝るがはやくいびきの声ぐうぐう」という類例があるので、確証はないけれども、ひょっとするとここで moire が脱落している可能性があるかもしれない。

7. 3. ‘wenash shiri chiwenchisehe koshirepa shiri’について

次の例の最初の shiri も難解な表現である。

(54) wenash shiri chiwenchisehe koshirepa shiri iyairaikere (岩18)

ウェナシ シリ チウエンチセヘ コシレパ シリ イヤイライケレ

我々が貧乏である 我々の貧しい家 着く 有様 有りがたい

(「貧しい私たちの粗末な家へおいで下さいました事、有難う御座います」(岩19))

これと似た例が『アイヌ神謡集』には一例だけ現れる。

(55) chisautari shinki shiri shuke kiwa (岩108)

チサウタリ シンキ シリ スケ キワ

姉達 疲れる 炊事 して

(「姉様たちは疲れているのに食事拵えし」(岩109))

(35) 北原次郎太氏より、cipapa が八重九郎氏のテキスト（北海道教育委員会1997：31）に現れることを教えられたので、「他に例なし」とする筆者の記述は誤りであったことが判明した。北原氏のご教示に深く感謝したい。もっとも、幌別地方の他の資料に現れるかどうかは依然不明であり、今後も調査を進めるべきであると考えます。

従って、wenash shiri も「我々が貧乏であるにもかかわらず」という逆接の意味を表している可能性がある。類例は金成、金田一 (1959 : 86) にも現れる (ouse ushiu bakusa ane shiri kamuikorachi tonoto ari ieham-an 「ただのしもべ、はした神でわたしがあのを神のごとくに酒をもってわたしをひきとめてくれる」)。しかし、このような shiri (siri) の用法は、これまでのところ千歳方言や沙流方言では見つかっていない。なぜ siri にこのような用法があるのか、今後の検討課題である。

7. 4. ‘chipokonanpe kohokushhokush’ について

次の例の chipokonanpe というのもよくわからない言い方である。

(56) chipokonanpe kohokushhokush (岩52)

チポコナンペ コホクシホクシ (「舟を漕ぎました」(岩53))

今のところは、chipo ko 「舟を漕ぐ」と解釈して、nanpe (neanpe 「それ」?) kohokushhokush と続くのであろうと推測しているが、kohokushhokush はどういう状況を指すのであろうか。舟を漕ぐために体を倒すことを hokush 「ひっくりかえる」とオーバーに表現している可能性はあるが、もう一つ、「漕ぎすぎてそれで舟もくつがえるほど」という意味である可能性もあると思う。

7. 5. 「複数形」の例外的使用について

アイヌ語の動詞には、単数形と複数形の区別を有するものがあるが (田村1988 : 18)、『アイヌ神謡集』には、文脈からみてほぼ明らかに単数形が予想される個所に、「複数形」の現れている例がいくつかある⁽³⁶⁾ (以下の例では、誤解の恐れはないと思われるので、直訳は省略)。

(57) poroshikupkur chirikipuni unotta arki (岩24)

ポロシクプクル チリキプニ ウノッタ アルキ

老人 立ち上がる 私に 来る

(「老人は起き上り私の処へ来」(岩25))

(58) nea nishpa kotan esapane wa okai (岩32)

ネア ニシパ コタン エサパネ ワ オカイ

その 旦那 村 首長になる て いる

(「彼のニシパが村の頭になっています」(岩33))

(36) 確実とは言えない例、また、助動詞の awokai、rokokai、終助詞の okai は除外してある。また、複数形が予想される個所に単数形が現れている例としては、arpaash (岩112)、chikohoshi (岩144) がある。ちなみに、(13)の kane okai も、ゴメが複数である可能性は前後の文脈から考えて低いので、やはり例外的な用法の例と言えるかもしれない。なお、-pa、-p に終わる複数形の例外的使用の例は、これまでのところ見出されていない。

- (59) nea hekachi... onaha ka, unuhu ka nunuke kor okai (岩32)
 ネア ヘカチ オナハ カ、ウヌフ カ ヌヌケ コル オカイ
 その 少年 父 も 母 も 大事にする て いる
 (「彼の子供は…父や母に孝行しています」(岩33))
- (60) Hoshki ekpe... kamuishirine okaiko (岩76)
 ホシキ エクペ カムイシリネ オカイコ
 先 来る者 神のように いると
 (「先に来た者は勇者らしく勇者の品をそなえて」(岩77))
- (61) Katkenokkayo... ikokanu wa okai (岩98)
 カツケノッカヨ イコカヌ ワ オカイ
 川ガラス 聞く て いる
 (「川ガラスの若者…聞いてい(て)」(岩99))
- (62) (atuichakchak)... hawokai (岩114、116)
 アトウイチャクチャク ハウオカイ
 ゴメ 言う
 (「…と言う」(岩115、117))
- (63) shine okkaipo shirkanuye kokipshirechiu okai chiki (岩128)
 シネ オッカイポ シリカヌイエ コキプシレチュ オカイ チキ
 一人の 若者 鞆を刻む うつむく いる ので
 (「一人の若者が鞆を刻んでうつむいていたので」(岩129))
- (64) shine menoko saranip se kane arki kor okai (岩152)
 シネ メノコ サラニプ セ カネ アルキ コロ オカイ
 一人 女 袋 背負う ながら 来る て いる
 (「一人の女が籠を背負って来ています」(岩153))
- (65) (shine menoko) toop ekimun paye wa isam (岩152)
 シネ メノコ トオプ エキムン パイエ ワ イサム
 一人の 女 ずっと 山へ 行く て しまう
 (「ずーっと山へ行ってしまうました」(岩153))

(66) shine menoko saranip se kane arki kor okai (岩152)

シネ メノコ サラニプ セ カネ アルキ コロ オカイ

一人 女 袋 背負う ながら 来る て いる

(「一人の女が籠を背負って来ています」(岩153))

(58)、(59)、(61)、(62)は、複数の主語の存在が想定できなくもないので、完全な例外とは言えない面もあるが、他の例、特に(63)から(66)は shine 「一人の」という表現が用いられており、明らかな例外と言って良い。もっとも、筆者の調査した千歳方言の資料においても、このような数の不一致の例はあるが、全体からみると例が少なく、また、それらの例も、一種の「不整序な文」とみなし得るものがほとんどである。『アイヌ神謡集』についても、このような複数形の例外的な使用は、やはり限られていると言えるが、これらの例の多くがノート版でも複数形となっている点を考えると(ただし、(61)は該当個所なし。また、(64)―(66)はノート版では単数形)、単純に「不整序な文」として処理して良いものかどうか、疑問が残る。今後の研究を期したい。

8. 終わりに

著者の辿った数奇な運命と天才的な語学的、文学的才能も相俟って『アイヌ神謡集』ほど有名になったアイヌ語テキストはこれまでになく、同種のものとしては、今後もおそらくこれに匹敵するものは出ないであろう。しかし、多くの人々に親しまれて来た割には、内包されている難しさや問題点が、これまであまり表面に出て来なかったのではないかと思う。本稿は『アイヌ神謡集』をより深く理解するためのささやかな努力の試みの一つである。

謝辞

本稿で用いたアイヌ語についてご教示下さった故白沢ナベ氏(千歳方言)、故織田ステノ氏(静内方言)に、深い感謝の意を表します。

参考文献

Batchelor, J. 1938. *An Ainu-English-Japanese Dictionary*. 4th ed. Tokyo : Iwanami-shoten.

知里真志保. 1936 [1974]. 『アイヌ語法概説』. 東京 : 岩波書店. (『知里真志保著作集』 4、東京 : 平凡社、1974 所収.)

知里真志保. 1953 [1976]. 「分類アイヌ語辞典第一巻植物篇」. 『日本常民文化研究所彙報』 64. 東京 : 日本常民文化研究所. (知里真志保. 『知里真志保著作集』 別巻 I. 東京 平凡社、1976 所収.)

- 知里真志保. 1954 [1975]. 「分類アイヌ語辞典第三巻人間篇」. 『日本常民文化研究所彙報』 68. 東京：日本常民文化研究所. (知里真志保. 『知里真志保著作集』 別巻Ⅱ. 東京：平凡社、1975 所収.)
- 知里真志保. 1962 [1976]. 「分類アイヌ語辞典第二巻動物篇」. 『日本常民文化研究所彙報』 87. 東京：日本常民文化研究所. (知里真志保. 『知里真志保著作集』 別巻Ⅱ. 東京：平凡社、1976 所収.)
- 知里真志保を語る会. 2004. 『アイヌ神謡集超入門』. 登別：知里真志保を語る会.
- 知里森舎. 2002. 『復刻版「知里幸恵ノート」』. 登別：知里森舎.
- 知里幸恵 (編). 1923. 『アイヌ神謡集』 (初版). 東京：郷土研究社.
- 知里幸恵 (編). 1926. 『アイヌ神謡集』 (再版). 東京：郷土研究社.
- 知里幸恵 (編). 1923 [1974]. 『アイヌ神謡集』 (再補訂版). 札幌：弘南堂書店.
- 知里幸恵 (編). 1923 [2002]. 『アイヌ神謡集』 (復刻版). 登別：知里真志保を語る会.
- 知里幸恵 (編訳). 1978 [2002]. 『アイヌ神謡集』. 東京：岩波書店.
- 服部四郎 (編). 1964. 『アイヌ語方言辞典』. 東京：岩波書店.
- 北海道教育委員会. 1997. 『八重九郎の伝承(5)』. 札幌：北海道教育委員会.
- 金成マツ筆録、金田一京助訳注. 1959. 『アイヌ叙事詩 ユーカラ集』 I. 東京：三省堂.
- 金成マツ筆録、金田一京助訳注. 1963. 『アイヌ叙事詩 ユーカラ集』 III. 東京：三省堂.
- 金成マツ筆録、金田一京助訳注. 1964. 『アイヌ叙事詩 ユーカラ集』 IV. 東京：三省堂.
- 金成マツ筆録、金田一京助訳注. 1965. 『アイヌ叙事詩 ユーカラ集』 V. 東京：三省堂.
- 金成マツ筆録、金田一京助訳注. 1966. 『アイヌ叙事詩 ユーカラ集』 VI. 東京：三省堂.
- 片山龍峯. 2003. 『「アイヌ神謡集」を読みとく』. 東京：片山言語文化研究所.
- 萱野 茂. 1996. 『萱野茂のアイヌ語辞典』. 東京：三省堂.
- 金田一京助. 1936 [1993]. 「アイヌ語動詞の第三類—複合動詞の人称形に就いて」. 『ゆうから』. 東京：章華社. (『金田一京助全集』 5、東京：三省堂、1993 所収.)
- 切替英雄. 1989. 『『アイヌ神謡集』 辞典』. 札幌：北海道大学文学部言語学研究室.
- 切替英雄. 2003. 『アイヌ神謡集辞典』. 東京：大学書林.
- 北道邦彦 (編). 2000. 知里幸恵 (著). 『ノート版 アイヌ神謡集』 (改訂版). 不明：私家版.
- 北道邦彦. 2002. 「『アイヌ神謡集』 諸版本の本文について」. 知里幸恵 (編). 『アイヌ神謡集』 (復刻版). 登別：知里真志保を語る会. 3-25 (巻末付録).
- 北道邦彦. 2003. 『注解 アイヌ神謡集』. 札幌：北海道出版企画センター.
- 久保寺逸彦. 1992. 『久保寺逸彦編アイヌ語・日本語辞典稿』. 札幌：北海道教育委員会.
- 工藤真由美. 1995. 『アスペクト・テンス体系とテキスト』. 東京：ひつじ書房.
- 丸山隆司. 2002. 『〈アイヌ〉学の誕生』. 東京：彩流社.
- 益岡隆志、田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法—改訂版』. 東京：くろしお出版.
- 中川 裕. 1995. 『アイヌ語千歳方言辞典』. 東京：草風館.

- 沼田善子. 1986. 「とりたて詞」. 奥津敬一郎、沼田善子、杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』. 東京：凡人社. 105-225.
- 佐藤知己. 1991. 「アイヌ語千歳方言における自称詞と対称詞について」. 『日本研究』5. 京都：国際日本文化研究センター. 89-104.
- 佐藤知己. 1991. 「日本語とアイヌ語、ニブツ語」. 『解釈と鑑賞』. 東京：至文堂. 17-26.
- 佐藤知己. 1992a. 「アイヌ語の自他の対応を有する動詞について」. 『アイヌ文化』17. 札幌：アイヌ無形文化伝承保存会. 14-25.
- 佐藤知己. 1992b. 「抱合からみた北方の諸言語」. 宮岡伯人(編). 『北の言語—類型と歴史』. 東京：三省堂. 191-201.
- 佐藤知己. 1995. 「アイヌ語の受動文に関する一考察」. 『北海道大学文学部紀要』85. 札幌：北海道大学文学部. 3-18.
- 佐藤知己. 1996a. 「アイヌ語のいくつかの基礎語彙の意味について」. 『北海道大学文学部紀要』88. 札幌：北海道大学文学部. 3-20.
- 佐藤知己. 1996b. 「アイヌ語」. 『外国語学がわかる』. 東京：朝日新聞社. 70-73.
- Sato, T. 1997. Possessive Expressions in Ainu. In T. Hayashi and P. Bhaskararao (eds.) *Studies in Possessive Expressions*. Tokyo : Tokyo University of Foreign Studies. 143-160.
- 佐藤知己. 1997. 「アイヌ語のいくつかの基礎語彙の意味について(2)」. 『北海道大学文学部紀要』90. 札幌：北海道大学文学部. 91-120.
- 佐藤知己. 1999. 「アイヌ語の復興とアイヌ語辞典」. 『月刊百科』442. 東京：平凡社. 58-66.
- 佐藤知己. 2000. 「アイヌ語千歳方言における反復による有音休止」. 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』6. 札幌：北海道立アイヌ民族文化研究センター. 207-218.
- 佐藤知己. 2001. 「アイヌ語千歳方言の第三類の動詞の構造と機能」. 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』7. 札幌：北海道立アイヌ民族文化研究センター. 51-71.
- 佐藤知己. 2002a. 「アイヌ語千歳方言の kane について」. 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』8. 札幌：北海道立アイヌ民族文化研究センター. 61-88.
- 佐藤知己. 2002b. 「アイヌ語動詞の特色」. 『言語』31(12). 東京：大修館店. 66-67.
- Sato, T. 2003. Phonological Status of the Epenthetic Glides in the Chitose Dialect of Ainu. *Hokkaidooritsu Ainu minzoku bunka kenkyuu sentaa kenkyuu kiyoo* [Bulletin of the Hokkaido Ainu Culture Research Center] 9. Sapporo : Hokkaidooritsu Ainu minzoku bunka kenkyuu sentaa [the Hokkaido Ainu Culture Research Center]. 11-34.
- 佐藤知己. 2003. 「酒田市立光丘文庫所蔵「蝦夷記」のアイヌ語について」. 『北海道大学文学研究科紀要』111. 札幌：北海道大学文学部. 95-118.
- 佐藤知己. 2004a. 「アイヌ文学における一人称体の問題」. 『北海道大学文学研究科紀要』112. 札幌：北海道大学文学部. 171-185.

- 佐藤知己. 2004b. 『古文献によるアイヌ語諸方言の比較研究』(科学研究費成果報告書). 札幌: 北海道大学大学院文学研究科.
- 田村すず子. 1988. 「アイヌ語」. 亀井他(編). 『言語学大辞典』1. 東京: 三省堂. 6-94.
- 田村すず子. 1993. 『アイヌ語音声資料(1-6)語彙』上、中、下. 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子. 1996. 『アイヌ語沙流方言辞典』. 東京: 草風館.
- 田村すず子(編). 2002. 『アイヌ語沙流方言の音声資料2 近藤鏡二郎の録音テープに遺されたワテケさんの神謡Ⅱ』. 吹田市: 大阪学院大学.
- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味』Ⅱ. 東京: くろしお出版.
- 不明. 1795. 「蝦夷記」.(酒田市立光丘文庫所蔵、分類番号726).

Notes on Some Linguistic Problems and the Interpretation of Lines Doubtful in Yukie Chiri's *Ainu sin'yôshû* [*An Anthology of Ainu Epics of Gods*]

Tomomi SATO

Summary :

In spite of its long and extraordinary reputation, it seems that only very few people realize the existence of various serious problems concerning the reliability of the text of *Ainu sin'yôshû*, although there remain many misprints in the text which have been overlooked by many previous researchers. I mainly point out the following two points about *Ainu sin'yôshû*.

First, I suggest that these mistakes may often be found by seeing the text carefully from linguistic points of view, e. g., the distribution and usage of the conjunctive particle *kane* 'and' and that this attitude sometimes serves to decipher lines difficult to understand or lines wrongly believed to be easy to read.

Second, I point out that the dialect in *Ainu sin'yôshû* exhibits an important, newly discovered dialectal difference from other dialects, e.g., the Saru dialect: the prefix *si-* 'self' behaves like a kind of inflectional prefix in *Ainu sin'yôshû*.

Key Words :

Yukie Chiri, *Ainu sin'yôshû*, the Horobetsu Dialect of Ainu, the Chitose Dialect of Ainu, *kane*, the Verbs of the Third Class, Glide Insertion.